

繪本通俗排悶錄

前篇
五

登

漫

遠
1192
5



告白

凡そ此の巻中見返ハ勿論其他ありて聊り余白あれ
或ハ猥褻なる畫圖を寫し或ハ卑俚ある語辭を書し
其の甚しきに至りて挿圖を彩りて却之を澆きのみふら
塗抹して以て其の何れを解き能いざらむに至る者あり
何ぞ其れ思ひざらば甚しき乎夫れ此書籍ハ我が貸し
以て業とあり所のものなり故之を澆がさるるふ於て頗る
營業ハ損害あり營業ハ損害あるに於て之れハ償金を
要せざる可らば仍て豫しめ此ハ告白し置と云爾

新稿 長門屋主人識

長門



家小在る成碍ありて逐出遺す。時々女を挑む盜婦を成
覺ゆる心配りて是を防ぎ天成日毎其婦を捕と。或々
飢死或ハ寒しめ狼藉の限を成るる依と。數月ありて死
す。康熙丁丑二十六年九月の如く女年十九なるも。天成晝夜付
纏と誘入女さるくと拒まざる共今ハ計畫と處る處死方あり。
八日の日女天成の智と曰我父母俱亡亡び方姓己の逐出玉。我身
何れ小もあは父の属と存るる。明日ハ重陽の嘉節あるに。醉成
畫し枕就ち。可あらんと云ふ天成大ハ喜び翌日菊鷲を具ハ父
女共飲と夜小至ア女父とて先小寢就む父屢早く寢
呼ぶ女燭を明くありて林小登りて。差くけ小側向居て。父思ひ

遠門 雜 1192

非月録卷之三



下り林氏海



戚安期の林
下り林氏海
棠を臥さ
久く闇と宗
嗣を求む

下り林氏海

難くありと再三促しつゝ女が曰。我ハ流子あり。未敬鳥を惧る事
 事を免まじ。先其物を我のこせ玉へと云。父喜ぶ夏甚く。被
 除くか。女父の首被を覆く。兼く用意せ。剃刀を取出し。左
 の勢を執へ。右の剃刀を執く。割下。天成起上。女の喉
 締る。息絶。天成割ら。一處血流。夥る。是も日暈。地小。女復甦。勢と剃刀と。持。鄰佑。喊
 々。衆人。入来。割を驗見。駭。即女を引。水
 縣府。至。縣令陳緯。と云。人。委驗。あり。郡公。小告。郡公。大。小
 莫賞。立。方姓の子。呼。堂上。姻。成。天成
 割深。痛。苦。三日。堪。忍。毒。服。死。縣令

親往。驗。王。張氏。家。賊。の。半。と。以。方。姓。夫。婦。給。半。を。以。と
 天成。母。給。本。府。の。黄。郡。尊。人。其。事。を。旌。記。給
 合。郡。傳。奇。節。と。せ。是。全。く。天。成。が。積。悪。の。上。益。夫
 婦。を。殺。せ。報。と。人。云。と

劉盼春

劉盼春。汴。梁。地。の。樂。工。劉。鳴。高。が。女。有。年。十八。汴。人。周。恭。と。忍
 び。逢。々。周。恭。が。父。嚴。め。禁。め。絶。半。年。逢。々。盼
 春。門。を。杜。獨。居。々。雲。間。地。の。富。高。金。帛。を。母。贈。女。を
 迎。へ。母。女。の。志。を。奪。是。與。へ。女。固。く。い。ち。應。へ。母。怒。々。筆。楚。と。止。周。恭。此。事。を。聞。書。を。遣。と

母の命に従入らるる我云へ。聆春笑と曰。安堂常人の比るらん。既
 ぬ身を君の季ねる。何ぞ他ぬ適の理わん。と答へぬ。數月あきて復
 富高方へ遣らんと責むを女竟ぬ。鏝めうやとくあさく死ぬる。
 其尸を火時餘燼悉焚火々所が佩る所の香囊焚火ごとく本の中
 あり。取と發死えし中ぬ周茶が詞簡一枚入とくわ。衆人敬馬き
 ありとく。宣徳四年のるりとも。

高三

高三ハ京師の娼女あり。姿美あり。昌平夫揚俊此高三が初と客を
 迎る時とを押とく。さう外人の手を経む。昌平別と去と。北邊の備
 とありと。數歳を経る。高三門を閉と客ぬ逢へど。天順年中昌平と

范都督名廣と石立了が諛言ぬ逢ふ其故ハ天子親北虜を征
 めんとく。軍を出し玉へる時土木と云處ハ至。戦利ありと天
 子北虜ぬ囚とぬひ。斯る大變の時昌平坐視と救ざり。ハ不忠
 ありとく。二人市ぬ引出さ。親戚又ハ故吏の輩一人も往者あり。俄
 一婦人あり。白衣を着と入來ぬ。見え高三ありと。昌平顧と曰。汝來
 と何を為ると云。公の死ぬ事へんとすと云。大ぬ呼と曰。天ある
 忠良の人今死する事と云。入觀る者駭とる。無。昌平是を止めと
 曰。已後我ぬ益とく汝を累せんと云。高三曰。我已罪ぬ行せんと辨
 と在下。公先往け妾隨と至らんと云。高三揚既ぬ喪とく。高三勸哭
 と其頸の血を吮。鍼線を以と頸を縫著け。昌平が家人を顧と去

く是を葬と云く即自練と取や旁必経く失ぬ娼婦も斯く
女も有るや。

許氏鶴

許氏が園の二の鶴の其雄斃く後歳餘あり客外に二の鶴を贈
る者あり孤鶴踽々として之を避く飲啄を同くせむ雄鶴は其匹の
林洞の間に入るとひそかに幸と此つが心を掛くと付やうとバ吮を
延く長鳴くと相搏ふ雄をさかやうく静まりぬ雙鶴池に在る孤
の鶴は庭に在る雙鶴の庭に在る時亦然と毎月月明く風和める時
ハ雙鶴翩翩と舞くとあちちと鳴かせや孤鶴は寂るる處に在ると
應へど或る風雨晦冥よる寒端石に鳴き霜葉柯と辞さる時哀

声は容く獨啼事清角は類せる聞く者悲まざる者無く主人
其羽翮を長せしめて遠く放て遣ふ抑他は公をりて人の妻
あまの別と悲さる程過ると忘と果と又更し新枕をうらむるん
ど此鶴は恥ざらぬや。

鷄

白鷄吳江地より来ると魏于敬が家小畜へ最よく闘ふ數其同
類を攻敗多し聲を聞ともあつるの鷄共あどぐ外去る其雌は雄
と共に来ると者あり一飲一啄必相偕小も亦時雄の勢を藉く他の
鷄を侮まると一日田家より一鷄を詒する黒鬚絳身有り是を群る中
内は暮小至くと白鷄の在牙を失る時を移くと白鷄血小

任羽を保と采ぬ彼黒き鬚なる者と闘つる者も初角入時各
 声せむ杖を術軍の如く又人の分け隔てん事を恐るふ似くも
 挑あひし困るるに至る。白鷄逐み明を失ぬ老嫗の来と分と他
 牙小根一々雌雛を率へ来と雄の目を失し成えと狂呼て止む
 轉とく鷄群の奔入と熟睨と黒鬚なる者の双の七が血の死
 ころ成見と翅を奮ひ相搏と致百歩を逐る往ぬる者壯るや
 とと然と共雄も此より億はぬ雌遂に食へど徒倚とく死ふる。雄
 も續と死失ぬ主人憐むと之を圍中小瘞ぬ是より黒鬚なる者
 鷄群の覇る主人其塚の銘しと曰
 生平雄死乎恫取而瘞之同其宮楚子之葬馬與六

子の埋狗也嗟寧從其隆



通俗排悶録卷之三了

午春
新刻
繪入
讀本

梅暮里谷我編著

新波遠說七長職 全部九卷

閑閑樓北山高畫圖

未也秋賣出申後

文化六年己巳春正月吉辰

本銀町通二丁目

須原屋善五郎

本石町十軒店

書林

西村宗七

御成小路平水町

山崎平八

通俗排悶録卷之四

友愛之部

目錄

張誠

武君仕

達州民

仇大娘

童氏犬

合五種

非問録卷之四



通俗排悶録卷之四

友愛之部

張誠

六樹園翁 譯

全亭正直 校

豫人今豫國張氏ハ其先ハ齊人なり。齊國の靖難兵起ク齊
 大亂ニ齊國兵の妻ハ兵ハ掠ルニ去リ去ル張氏常ク豫國遊ビト
 知る人ヨリクニ去リ去ルバ遂ニ引移ト住リ。叔妻ヲ娶リ子を生ク。訥
 と名づル。幾クモあて此妻死ス。又繼室ヲ娶テ此妻亦男子ヲ
 生ク。不城と名ヲ呼ブ。繼室ハ牛氏ナリ。性悍。訥ヲ訥ヲ嫉む。其
 甚ク。奴ノ如ク此ヲ使シ。日々柴一荷ヲ伐ラシ。少クモ鞭ラシ。罵
 責常ナリ。誠ハ甘脆ヲ隱シ。蓄置トク食ハセ。又師ハ從ハセ。書ヲ

讀せらむと。誠漸長しく親孝をう。兄を敬へ。兄ある訥が苦
 める。忍びど。陰の母を勤むと。も聴事無し。一日訥山入と柴を伐と
 未終らざる。大なる風雨値と。薪を負く。帰る。母を母驗と。薪少と
 云と怒。食を與へむ。訥泣く。室入と。臥居ぬ。誠師の家へ。帰来
 と。兄が愁。色を見と。病め。やと問へ。兄。餓と。云入。其故を問。兄
 斯くと。吉。誠聞と。公苦。か。ぬ。暫。わ。り。と。餅。を。懷。み。來。と
 兄。小。與。兄。い。づ。こ。り。持。と。來。つ。ると。問。我。竊。小。麥。の。粉。を。取。往。と。鄰
 婦。を。借。と。作。ら。ぬ。先。食。と。よ。斯。と。言。う。る。と。云。訥。之。を。食。て
 弟。の。囁。と。曰。此。後。斯。る。為。さ。と。若。事。泄。ら。ぬ。女。を。累。せ。ん。我。一。日。の
 一。度。食。せ。ば。飢。る。と。も。死。す。る。ゆ。え。至。ら。ず。誠。が。曰。兄。の。故。と。身。弱。く。お。せ。ば

馮。の。柴。を。刈。玉。の。んと。云。と。其次。の。日。竊。山。の。赴。と。兄。が。樵。する。所。の
 至。る。兄。見。と。驚。と。汝。來。と。何。を。為。と。問。を。答。と。曰。木。を。樵。を
 助。え。と。と。兄。が。曰。誰。う。汝。を。遣。へ。と。弟。が。曰。我。自。來。と。兄。が。曰。汝
 い。と。薪。を。樵。る。る。汝。を。え。ん。や。樵。の。能。と。と。猶。不。可。あり。速。に
 歸。え。と。云。へ。と。誠。聽。と。と。柴。を。断。と。兄。を。助。と。明日。の。斧。を。指
 と。來。ん。と。云。入。を。兄。之。を。止。め。と。弟。が。指。を。見。と。血。出。と。履。も。穿。と。と。り。
 兄。悲。と。曰。汝。速。に。歸。ら。む。ん。バ。我。斧。を。以。と。自。到。と。と。死。さ。ん。と。云。と。兄。が。
 誠。是。非。を。歸。る。兄。之。を。半。途。に。送。と。再。山。に。歸。と。樵。を。り。歸。
 時。滅。が。師。の。家。に。至。と。曰。吾。弟。幼。け。し。能。之。を。閑。玉。ひ。と。山。入。る。度
 を。止。め。玉。へ。虎。狼。の。恐。と。あ。と。云。へ。師。言。ふ。午。前。何。く。へ。往。と。る。故。の

早竹古く折檻し一と云々を。訥家の帰す。城の謂ふ吾言
 を聴きし師の言を受ぬるよと云云。城矢とあるるのうと矢只
 城翌日斧を懐めし山へ入来ぬ。我兄えと駭く曰。我汝来ると
 勿と云つる何ぞ又来ると云云。共城應へむと薪を刈る。殊ぬ
 息と其業をるを止す。汗流まると頭よを落し。斬しと一束とありと
 辭せむと返す。師の家へ至す。師責る事昨日の如し。城を
 の俣ぬ告ぐま。師も其賢なる歎く。是を山へ往くを禁せむ。兄
 屢止めよと云ふを聴きしと日々山へ来り。一日數人と山中の熊を
 居るふ歎と虎走り来けむ。衆人惧と伏し。中へ虎城を啣と
 往きぬ。原来虎の人を負と行へ。緩たゆめく。訥追つる。此時訥力を

出し斧を虎の膝へ投ぐ。虎痛まると狂ひ奔り。往く之を追ふ
 とままを及ぶ。及ぶと訥虎を見失ひ。返り来ると哭く。弟
 我為ぬ死しぬ。我何ぞ生べと云と。斧を取ると自刎んとす。衆人急
 き忙と留まると。斧の刃一寸計肉へ入ると血流る事。漏れ如し。衆駭
 と其衣を裂くと。割口を包み扶くと。家へぞ帰る。母泣く。訥を罵く曰
 汝吾兒を殺せむ。然るも聊頸の割を付と。責を塞んとするやと云
 訥呻つ云。母人煩悩を王する。死せぬ我いづく生くとわらんと云
 其割痛まると眠る。能へぬ。昼夜壁に倚ると坐し。哭を父へ此も又
 死らんかと恐まると。時と相就くと少く。哺めを牛氏見ると。諾責む
 納遂め食せむ。三日わると。斃れぬ。村中の巫あり。常の冥土へ往來する

者あり。訥夢あり。小之小遇。弟が行方を問ふ。巫我聞事あり。と
 訥を導く。往時一皂衫を着る人の城中より出るあり。巫此人に向く
 城がら我問ふ。皂衫人佩る囊の中より牒を取出し見せ。三日の中
 男女死せる者百餘の中張氏ある者あり。と云。巫疑く若他の牒の
 内やあると問ふ。皂衫人の曰。此筋へ我支配する。何ぞ差ふ事あるん
 訥信せざ。と云。巫を強く城中へ入せ。城の中皆死失せ。者おそ
 往來し。故識する人おれ。就く弟を問ふ。未だ見せど。い
 時の諱く菩薩至り玉(玉)と言ふ。見え。空中の偉人あり。毫光上下
 小徹せり。巫訥を挫く。跪き。衆鬼鬩騰する声地を震はむ。菩薩揚
 枝を以て。偏甘露を洒多。其細かるる。塵の如し。散れし。かた消す

如く失せる。訥我割の上。露う。痛を忘まぬ。巫又導て
 俱の帰。来ぬと覚え。死し。二日あり。竟。魁々。父母に向ひ
 見え。所を告ぐ。誠死せし。在り。母あ。成造。言あり。と
 云く。及く。罵。耻む。訥割痕を損。良の瘡。力。起。父を拜
 し。曰。我今。云と。穿ち。海。入。戒を尋ねんと。弟。逢る
 る。我。再。帰。願。父。見。以。死。せり。と。ひ。玉。と。云。翁。入。無
 所。引。往。共。泣。別。其。普。此。處。彼。處。と。尋。あり。死。苦。田。へ
 盡。之。巧。行。年。を。逾。金。陵。地。達。け。衣。皆。蔽
 是。道。の。傍。背。を。曲。物。を。乞。わ。り。き。官。長。と。見。え。人。数。三
 具。馬。曳。せ。過。る。人。訥。走。則。小。避。居。け。其。中。小。駒。小

乗る一少年あり。屢訥を顧み玉る。訥其貴公子たるを以て仰ぎ
 視るる成せむ。少年の人馬を駐め下で来て呼ぶ。吾兄ありあむ
 やと云ふ。訥首を巻く審視せし誠あり。嬉しく走りて手を取て声
 かく計泣く。誠も泣く云々。兄何漂落しと斯く成玉るや訥其
 情を言ふ。誠益悲しく官長自ら一官長命と訥を馬に
 載せ。誠と轡を連移り歸王ひぬ。初山中ゆく虎の呷まると時いろ
 る。ぬらりとぬく路の側小捨置ける。誠も知らず氣を失ひ一夜
 臥居る。適張千戸と云ふ人都て来て此を過ぐるが其貌文あり
 見と憐れとささぐ介抱させ玉る。漸しく横たむ。叔載と共帰
 傷處を療治させ玉る。日を経て全く痊む。千戸子無り玉る

誠を子とあそり。今日誘へて物見に出想へど納み逢る。誠道
 道とてこの次第を逐一訥に語る。斯く千戸納み對面を訥拜
 謝しく已まむ。誠帛衣を捧ぐ兄に進め酒を設て物語を千戸
 問ふ。貴族の豫名何なり。幾とぞや。訥曰親族ある。父の
 原来存名何なり。流寓し今豫止む。千戸曰僕も亦存
 人あり。何の里の居む。答曰曾父の言と承り。東昌地の
 轄に属せりと云ひ候ひ。千戸敬馬と曰さて我同郷あり。何の故
 小豫め移らむ。訥曰日前母のこの掠めまら。家ハ火火焚
 家産を失し時先西道名賈し往來熟せる所あり。遂
 小彼處止候と云ふ。千戸の敬馬と君が父の名いんと問ふ

非問録卷之四

六



長誠の為
 山中の樵
 不意
 虎に御らる

長誠の為
 山中の樵
 不意
 虎に御らる

訥之を告まば千戸はうく顔を視て立て内へ入らぬ何れも
 一とく大夫入出と訥の向くと日。汝は是張炳之が孫ありや訥然と
 答へ大夫入出を目の受と千戸の向ひ此汝が弟ありと云訥兄弟
 其意を解する事あり。大夫入日我汝が父の嫁一と云年あし七流
 離し北の去り身指揮下知の何某の属一と半年あし七汝が
 兄を千戸を生め又半年を過し指揮死ぬ汝が兄父の養を以て
 此官の遷り。今任を解り我常々郷里を念と屢人を遣て齊西の豫國の
 らしむと不見る所あり。何ぞ知らん故が父西の徙まり。西の豫國の
 と云と始終を詳の語やろ齒を以て序まば千戸四十一歳最長なり。
 誠の十六歳中く最少あり。訥八年二十のく千戸のく中めぞろりぬる。

千戸兩人の弟をえと惟るわねとこちうと共の臥處を同くしと
 朝夕親睦する。叔共の歸るを計を作と時大夫入牛氏の容と
 住む。否玉の家を折つ。天下豈父無の困わんやと云は是れ於
 宅を鬻き装を辨し日を撰て西豫國へ趣る。既れ其里の抵
 一人ありと影を外の伴ふ人も無とく想をいど訥が至まると
 喜ぶるの限あり。其終とて死せりと想ひし誠も歸來を
 愈敬馬喜と物ものごとくはく。程もわらば千戸母子至まると
 告まば翁翁を輟るわねと云と喜もわらば悲もなま

立ちまゝひとくぞ居る。千戸の八と父を拜と。大夫人の翁の向ひく突
あり外る。此時媪婢斬卒入来と内外の堅く。公翁が家の居
あまのく。庭のあまのやぐ。立ちまゝひとくぞ居る。誠母をいんごまへ父の向
ける死せりと云へ。蹄嘶と問絶しく。斬の魁と。千戸財をいしと
樓閣を建つ。師を招と。西弟を教させると。馬の槽のどり入の
室の満ごまご。ゆるぐ。大家の風ぞ備で。後。

武君仕

河南沛川名の人の武君仕と云人あり。其兄の君相と云たり。少して
縣尉の代官の燈籠夫と。尉怒るるのあまの之を責る。尉の向と
曰。大夫の殺まへ。辱む。ゆるぐ。と云。遂の去と。軍の従と。往る。か。

ヨク戦の功あり。君仕の驃騎將軍の將軍の谷の至。君相の遊撃將
軍の名の至。君仕嘗と。孫可望の敵軍數十萬の對と。軍
騎ゆく二十餘人を率と。陣を陥る。賊の敢と。逼ら。西翼の軍陣
を張と。之を圍め。一騎還来と。君仕已の死。王と。告げれば
君相聞も。あまの稍を奮と。賊軍の走。入る。賊の恐と。近る。者
る。君は賊を數人殺し。後より。君相の斯共知ら。東西の警
と。廻る。君仕も兄が。復馬を躍ら。陣の入。兄の弟
兩騎數十萬の賊中を突と。回。賊皆聲を。真の漢子。城の
ありと。言け。又一日君仕賊と戦と。飛礮の中ら。血流と。面
ありと。即馬上の在と。帛を裂と。之を畏。礮を飛せ。賊の

生擒とく歸す其腦を食する。其勇敢此の如し。嘉善地の徐岳と云
人此傳を書き徐岳を見聞録に載り。徐岳此君仕と同年ゆと突
亥の生あり。一日燕坐しと君仕が臉上の青癩をこえ。何ぞ斯
累く之と問ふ。君仕徐岳がひを引く之を按せたる内を皆
細く鉄珠子あり。又衣を掲て腰肋の間を示す。鉄珠大く垂るあり
背上傷痕鱗の如し。徐岳も興あくと實に百死の中を経る男あり
けりとぞ感とる。

達列民

四川の達列細の民某と云者。兄弟二人甚友愛せり。弟が室に
娶らば他出と有る。其兄身を賣り十二金を得る。弟の為に

婦を娶らんとく聘を遣り。弟歸りて婦を娶りて兄が身を賣り
るの状知り兄と相持て泣く。さう其婦を母の家へ遣り。原の聘金
と取りて兄の身を贖へんとす。湖南地の流民二人其事を知り
婦の尾を往りて中途で婦を殺し死す。其金を攫りて去らんとす。其
俄に迅雷大震二人を撃つと立どろり斃せり。其尸共婦が家の門
外跪く。中十二金を納り居り。頃ありて婦復甦り其家へ歸至り
二人の者早門外へ跪くも有る。婦其故を語りけり。兄弟の
よも隣里列人來りて觀る者堵の如く。嘆して異とせざる者無し。
仇大娘

非局録卷之四

仇仲ハ晋名國の人あり。其郡邑を知らず。世の亂に遇りて
賊敵のあり

俣へらる。挈らる。と。往ぬ二人の子あり。兄を福と云ひ弟を禄と云と
 共の初。継室へ邵氏あり。二人の子を愛と育てんと。幸の貴業
 全くと。飢寒の憂あり。然る小連年飢饉うち續る。上り豪
 強る者。女主人たる。成梅と。無理を志す。かよめ取る事。ヨリ。仇が
 叔父尚廉と云者あり。其嫁せん。を利と。屢勸を。邵氏
 志を夫と。揺らぐ。邵氏尚廉を食らんとす。尚廉陰あり。大姓をも金
 を取。券を遣。邵氏を強。大姓を送らんとしける。又茲の同。絶の
 人の魏鳳と云者。仲と昔。不和あり。仲が妻の邵氏。寡と
 成る。見と。さ。浮言を造。言弘。大姓聞。邵氏と
 不徳ありと。嫌と。迎る。夏を止。邵氏。聞知。共寛と

述る。牙あり。獨うち。歎と。朝夕。弟を。一居。病と。成
 と。四。自在。床。臥居。福年十六。成。急
 婦を。娶らせ。美。秀。肥。性。賢。能。小
 一。経。紀。賢。家。中。裕。弟。の。禄。を。を
 師。小。従。へ。書。を。讀。せ。魏。鳳。忌。嫉。陽。の。睦。く
 頻。の。福。を。招。酒。を。飲。せ。其。間。小。乘。曰。尊。堂。病。玉。ひ。生。産
 を。理。事。能。弟。坐。食。且。婦。を。取。ら。大。耗。と。云
 命。君。が。為。小。計。早。く。家。を。折。ん。如。と。勸。む。福。歸。と。婦。小
 謀。る。小。婦。あ。る。死。事。あり。と。叱。母。小。吉。ね。母。怒。す。詬。罵。之。成
 福。も。下。小。恚。と。輒。家。有。る。金。錢。を。他。人。の。物。の。如。く。思。ひ。漫。之。成

遣入魏夙之を誘と博賭をうさせたるに倉の粟漸空く成と糧
 も絶るに至りけり。母憤怒を共せんよと無し。遂に家財を分と遣
 たり。幸ぬ姜女賢めと飯を炊と母の仕ふ。福家を分ちとくを
 益憚と博賭をあり。數月の中田産悉債を取らと計をちる所を
 ぬ至まり。因りて妻を券とあり。財を貸らんとと共承引する者
 無し。邑人又趙閻羅と云者。の網を漏るる巨盜あり。是を
 彼と心よく賞を出一と福の假多。數日めと又之を失へ。券の
 盟ふ背るんとせり。趙目を大きく成と責多と福大の惧と妻を
 賺くと趙が宅へ遣り。魏夙やと竊の喜び急奔と姜家の告
 つ。其意の仇氏の家を敗らんと。姜秀才怒と之を官に訟ふ福惧る

告白

凡そ此の巻中見返ハ勿論其他ありて聊ら余白あれば
 或ハ猥褻なる畫圖を寫し或ハ卑俚ある語辞を書し
 其の甚しきは至りて挿圖を彩りて却之を宛きのみふに
 塗抹して以て其の何れを解き能はざるも至る者あり
 何れ其れ思はざるも甚しき乎夫れ此書籍に我が貸し
 以て業とある所のものなり故に之を宛かざるもふ於て頗る
 營業に損害あり營業に損害あるに於て之れに償金を
 要せざる可らば仍て豫しめ此を告白し置と云爾

新稿

長門屋主人識

